

郷土らがさき



令和3年度の市民文化祭に参加して写真展

(中島・大山道めぐり、柳島の海岸風景、海辺の野鳥たち)

第154号

発行 令和4年5月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集責任 平野文明

踏切の話3	大踏切と最乗寺踏切	原俊一	……2
茅ヶ崎の海4	天草(てんくさ)の話	名取龍彦	……7
『皇国地誌』と『我が住む里』の姥島記事		平野文明	……13
風(自由投稿欄)	たのしみは……	前田照勝	……22
郷土会寄贈の写真を自治会館に掲示		羽切信夫	……24
史跡文化財めぐり報告二件		平野文明・山本俊雄	……26

七十路を越えて、永(なが)の分かれの盃を交わした人たちが多くなりました。「現世を旅立てば無に帰す」という人もいますが、先日私はこんな夢を見ました。

昔の仲間や友達、同僚、学校時代の先生、両親や伯父、叔母など、すでにお見送りした人たちに囲まれているのです。みんなはお茶を飲んだり、おしゃべりなどしています。目が慣れてくると、見渡す限り大勢の人びと。子どもや赤ちゃんもいます。植物、動物、虫たち、武士や高貴な人、縄文人や弥生人、外国人、すでに絶滅した恐竜たちまで。そこで気づきました。これは、この世が始まって以来、旅立ったすべての「いのち」たちの世界なのだ、と。さらによく目をこらすと、知らない世界ではなく、私が生活しているこの土地、この場でした。ただ、彼らは重なっているのです。だからギュウ詰めになっていない。幽霊かなとも思いましたが、生き／＼と動き回っています。

突然、父が私に言いました。「お前はあそこで寝ているよ」。見ると確かに私は布団で寝ていました。何だ みんなには私が見えていたんだ!。そして目が覚めました。このとき、来世はこの世にあることを知りました。

茅ヶ崎郷土会々長

平野文明

東海道線 茅ヶ崎の踏切名とその物語(その二)

「大踏切」と「最乗寺」踏切



図1 大岡祭で大踏切を渡る行列 (所蔵 個人蔵 提供 茅ヶ崎市)

今はない「大踏切」と、浜降祭の時に南湖の神輿を除けばほぼ全ての神輿が通った南湖の踏切「最乗寺踏切」の話をしませ。

一 大踏切

まずはかつては茅ヶ崎の南北の動脈「大踏切」。当時は新聞にしても、市の広報や刊行物にしても「大踏切」と呼んでいました。日本経済の成長に合わせて

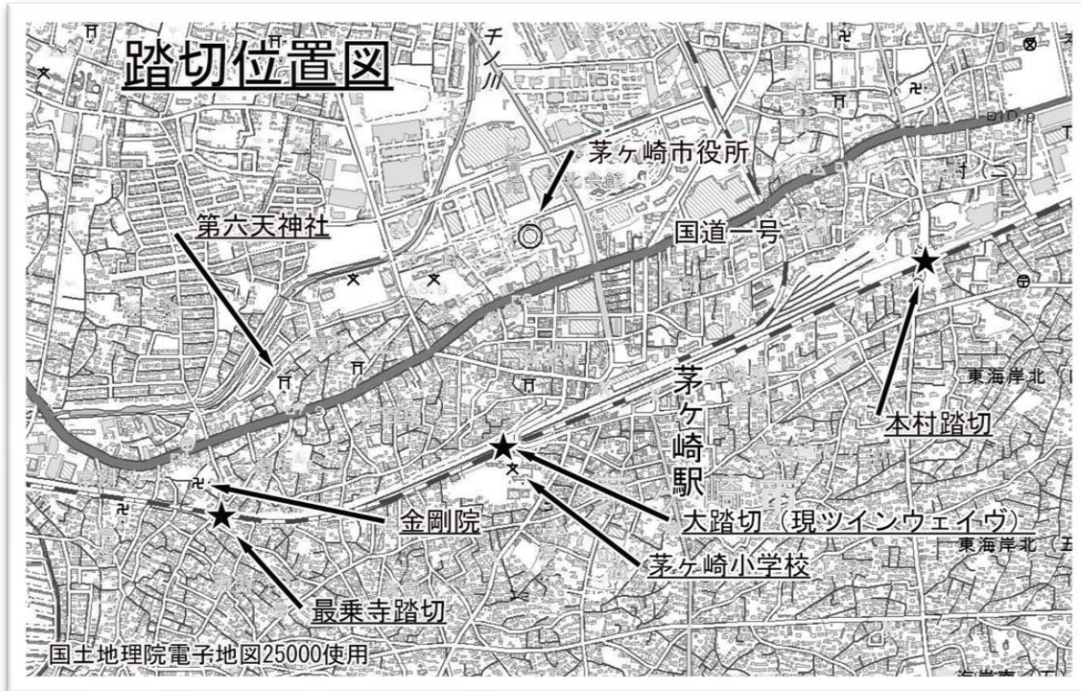


図2 ツインウェイヴ工事現場 (茅ヶ崎市所蔵)

「茅ヶ崎踏切 58K777M 茅ヶ崎市新栄町1」

東海道線の本数も増えたために遮断機が下りている時間が増えました。いつしか「開かずの踏切」と言われるようになり、人、自転車、車が集中して遮断機が上がるや否や自転車や自転車が踏切一杯に南側から北側から競争よろしく走り始めます。人は歩行者用の踏切を、車は自転車が通った後を通っていましたが、混雑というより混乱といった方が合っているような状態でしたが、事故はそれほどなかったように思

原 俊一



います。ともかく不便でした。茅ヶ崎の南北問題の一番のネックでした。遮断機が閉まっている時間は一日一三時間以上、一回の閉鎖時間も長い時で二〇〜三〇分に及んでいました。こういっただ中で、歩行者の不便さ解消と安全のため一九七二年(昭和四十七年)三月三日に南北に跨る渡線橋が完成しましたが歩行者にとって階段の昇降

は面倒なのであまり使われませんでした。人が南北自由に通れるようになったのは一九八四年末に出来た橋上駅舎と自由通路が完成するまで待たなければなりませんでした。

車が自由に南北を往来できるようになるのは一九七四年の「茅ヶ崎ツインウェイヴ」完成によってでした。この時に所謂「大踏切」はなくなりませす。

「大踏切」の正式な名称はなんでしょうか。市の担当の所に聞いても分かりませんでした。ところが「大踏切」関連の写真の提供を市にお願いして見せてもらった写真の中に答えが見つかりました。大踏切の工事写真の中に「茅ヶ崎踏切」とありました(図2)。いわゆる大踏切は「茅ヶ崎踏切」だったのです。生まれてから大踏切と呼んできた踏切が通称でしかなかったと初めて知った次第です。

本村から茅ヶ崎小学校に通っていた頃、ここには警手がいて、列車が通る時に笛を鳴らし踏切の遮断機を上げ下げしてました。その頃の写真が市にありましたが、寄贈者の許可が取れないと市からの写真の提供が受けられませんでした。寄贈者が逝去していたり、住居が不明になったりで連絡がつかない場合、せつかく寄贈されている写真が利用できないというのはとても残念なことです。

二 最乗寺踏切

それでは最乗寺踏切について故篠田貞太郎氏が『郷土らがさき』四三号(文献1)に寄稿したのを見てみたいと思います。

最乗寺踏切の由来

茶屋町のバス停から南へ曲って、南湖の部落へ入る唯一の幹線

篠田貞太郎



図3 最乗寺踏切プレート

それが今年(筆者注 昭和六十年)の一月十七日、田中、塩原(二両氏と柳島からの帰り道、最乗寺踏切を渡りながらフット、そうだそうだ『米山稔さんが確かその由来を知っていられる』と云う話を、曾って米山千代子さんから聞いたことを思い出したのだ。そしてその場からすぐ引き返してお近くの米山稔さん宅へお邪魔して伺ったの

道路、つまり金剛院前を通るこの道路は市内廻りのバス路線にもなっているが、その金剛院からほんの二、三〇㊦の所に東海道路の踏切がある。今では警報機つき、遮断機つきの無人踏切になっているけれど、それ以前は長い間踏切番が昼夜常駐していて番人小舎なども建っていた。さてこの踏切のことを当初から最乗寺踏切と呼んでいたが、その命名の由については知る人も少なく、私などは多分そんな名称のお寺でも近くにあったかなあと、あまり気にも止めないでいた。然しその附近に元お寺があったらしい形跡もないし、その遺跡らしい痕跡も見掛けた事もないのを不思議に思っていたが、特別にその点を追跡することもしないで最近まで過してしまった。

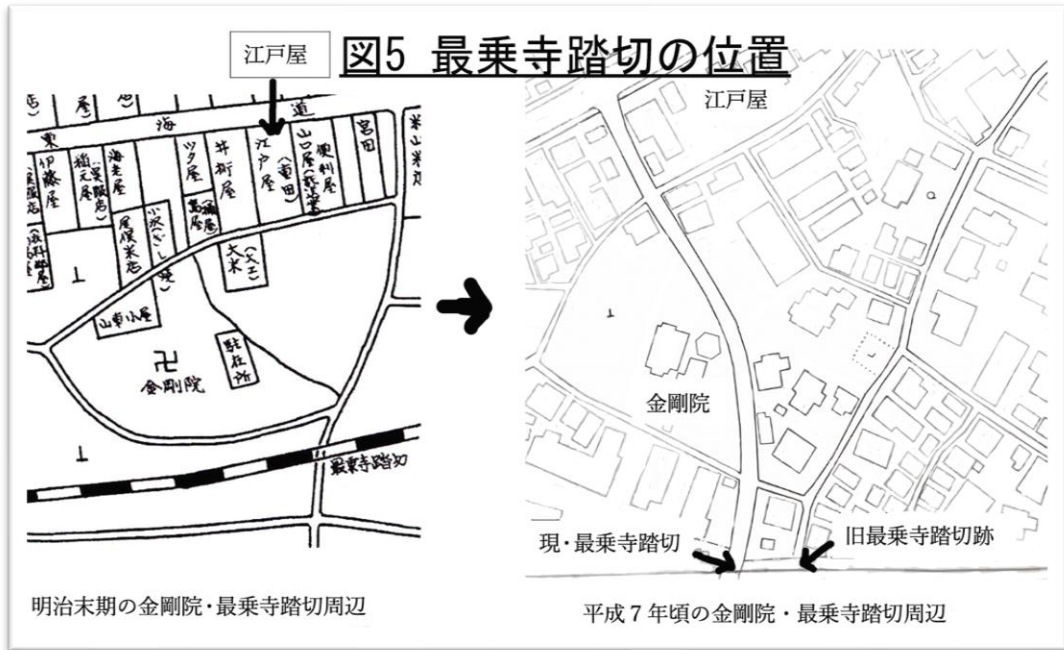


図4 最乗寺踏切跡 南から線路を望む

が次の話である。

米山稔さんのお話

木村幸太郎さんの家の事ですが、このことがあつてから既に百数十年は経過しているので、最早時効になっていますから実名で云つても差支えないでしょう。その人の先々代に当る七郎工門さんの時、道了尊最乗寺(筆者注 南足柄市)が、お寺の用材として切つて置いた杉材が、折柄の大台風で一本残らず流出してしまつたことがあります。あそこはご存知のように小田原在の関本から西の方一帯に広い杉の樹林を持っていますが、合憎くその時切り倒した用材が多量にあつたものですから、上の方からの鉄砲水で流されてしまつて、そして下方の、おそらく酒匂川まで一気に押し流してしまつたものなのでしょう。



ところがこれが流木となって南湖の浜に多数打ち上げられたわけですが、それを熱心に拾い集めて最乗寺まで届けてあげたのが七郎エ門さんだったわけですよ。今なら勿論トラックもあり、道路も舗装されていますから、小田原在まで運ぶのもさしたる苦勞もないでしょうが、当時どのような

な手段で運んでやったのか、マア一通りの努力ではなかったろうとは想像出来ます。この好意にいたく感激した最乗寺側では、何をもってこの好意に報いようかと考えに考え抜いた末、今後この家に「屋号として最乗寺を名乗る」ことを免許したと伝えられているわけですよ。(以上 文献1から抜粋)

この最乗寺踏切の話に米山稔さんの甥の内山昭雄氏が、最乗寺踏切の名称は新道が出来た時に採用されたものか疑念を持ち、考察されました。現在の南湖通りに至る最乗寺踏切の道は新道であり、旧道は現在の十間坂二丁目6番の26号と28号の間にある袋小路になっている道路と踏切警手の人から聞いたという。そこで、現在の最乗寺という踏切名は新道になってからか、旧道からなのか調べたら、『南湖郷土誌』(文献2)の八四ページに「震災前 茶屋町の町並」という地図に旧道の踏切名が「最乗寺踏切」とあるのを突き止めた次第だったそうです。第五図の左図がそれです。その右に、新道ができてからの図も載せておきます。

この旧道は第六天神社の前で東海道を斜めに交差し西南方面に向かう鎌倉街道というそうです。内山昭雄氏のお話は『郷土らがさき』六〇号「最乗寺踏切の名の由来について」(文献3)と、同八七号「再び最乗寺踏切について」(文献4)にあります。

三 本村踏切 (現在は本村地下道 平成二年八月開通)

平成二十四年四月一日発行の『広報らがさき』No.九四七の「道を造る、道が創る」という記事に、本村踏切の記述と写真が載っているののでここに記載します。

JR東海道線を渡るには、本村踏切を通らなければなりません



図6 昭和60年ころの本村踏切 (写真所蔵 茅ヶ崎市)

(原注記 海側から撮影。向かって左にみやこ染の工場が写っている。)

でした。この踏切も一日に八時間あまり遮断機が降りていたため「開かずの踏切」とも呼ばれていました。写真は昭和六十年ころの撮影です。

【参考・引用文献及び画像】

文献1 篠田貞太郎「最乗寺踏切の由来」(『郷土らがさき』四

三号 茅ヶ崎郷土会 昭和六十(一九八五)年五月一日発行

文献2 資料館叢書11『南湖郷土誌』茅ヶ崎市教育委員会平成

七年刊

文献3 内山昭雄「最乗寺踏切の名の由来について」(『郷土らが

さき』六〇号 平成三年一月一日発行に収録)

文献4 内山昭雄「再び最乗寺踏切について」(『郷土らがさき』

八七号 平成十二年一月一日発行に収録)

画像1・画像2・画像6の所蔵は茅ヶ崎市

画像3・4は筆者撮影

画像5は筆者作成

踏切位置図 編集者作成

茅ヶ崎の海よもやま話 (その四)

天草(てんぐさ)の話

1 はじめに

生まれ故郷と離れた地で暮らしていても、古里と現住地がつながる何かがあれば、それに興味を持つ人は多いと思います。私の生まれ故郷は、本連載初回に紹介した長野県の諏訪です。現在、私は茅ヶ崎の純水館について研究を進めています。純水館に興味を持った理由のひとつは、蚕糸業に関して長野県と茅ヶ崎が繋がっていたからです。長野県を本拠地とする純水館が、南湖院や小山別荘を「縁」に茅ヶ崎町へ進出して、大正六年に「純水館茅ヶ崎製糸所」として創業します。長野県と茅ヶ崎の繋がりで、本稿のテーマは「天草(てんぐさ)」です。天草でも長野県の伝統産業と茅ヶ崎の海が繋がっていました。前半が茅ヶ崎の天草に関して、後半が長野県の寒天づくりの取材報告です。

2 天草・心太・寒天

天草は何の原料かご存じですか? 「心太」は読めますか? 「寒天」は何だかわかりますか? 天草は心太や寒天の原料になる海藻です。「心太」は「ところてん」と読みます。不思議な読み方です。天草、心太、寒天について『信州寒天業発達史』から引用します(文献1)。

『和名抄』では天草を凝海藻(ぎょうかいそう)といい、「俗(三用)心太(二字)云(古)々(布)止(ト)」と記してあり、『楊氏漢語抄』に

名取龍彦

は大凝菜(だいぎょうさい)の文字が散見している。(略)さらに平安京の中東やしきの下に心太みせと称するものがあつて、心太を販売していたことが知られるので、今から一千年余も前に、すでにテングサ類から心太をつくって食用とし、商品として販売していたことがわかるのである。このように心太の名称については初め「凝(こころ)」意味で「ココロブト」といい、文字も心太と書いたのが、いつしか心太を「ココロタイ」と読み、さらに「ココロテン」「トコロテン」まで転化して来たものといわれている。天草を晒して白くしたものを煮ると、とろとろになる。これを麻袋などで漉して箱の中で凝結させたものが心太であつて、半透明の美しいものである。これを適当な大きさに切つて「テン突き」で突き出し、醤油や酢などをかけて夏の清涼食品とする。(略)

今から三百二十余年前の明暦年間、徳川四代將軍家綱のころである。薩摩藩主島津大隅守が江戸へ参勤交代の途次、山城国伏見の駅御駕籠町美濃屋太郎左衛門方に一泊した。同家では膳部の一味として心太を供したが、時あたかも厳寒の候であつたから、その残片の戸外に棄てられたものが凍結し、そのまま日を経て軽くふわふわした干物のようなものとなつた。太郎左衛門はこれを不思議に思い、試みに溶解してみると、従来のところてんより白く透明で、ほとんど海藻の臭気のない美味のものが得られた。これが寒天の製造法発明の糸口であつて、その後同家においては、しばしばこれを製造販売し、また客膳に供していたが、いまだ寒天の

名称なく「ところてんの乾物」といわれていた」尚、寒天の起源の年に関しては異説もあると書かれています。

寒天は心太を凍結乾燥(フリーズドライ)したものです。「心太」も「寒天」も昔に比べて、存在が薄れて来ました。しかし、羊羹(ようかん)は皆さんも存じだと思えます。ちなみに羊羹は小豆の餡(あん)を寒天で固めたものです。以前、統合型リゾートを巡る汚職事件では、現金と一緒に老舗Tの羊羹を渡したという報道がありました。最近、災害時等の非常食や保存食としても注目されています。糖度が高く、高カロリーなため、適切な保存状態であれば常温での長期保存が可能だからです。

羊羹の本来の意味は、羊の肉を煮たスープですが、その意味を失って使われている言葉です。意味の変遷については、紙数に制限がありますので省略します。興味のある方はお調べください。

大分昔、何かで「茅ヶ崎で獲れた天草が諏訪へ運ばれていた」と読んだ記憶がありました。本稿を書くにあたり、丁度良い機会なので天草に関する茅ヶ崎の資料を探しました。三つありました。

『茅ヶ崎市史研究30』に掲載された、潜水漁をしていた二人の女性への平成十六年(二〇〇四年)のインタビューです。内藤貞子さんは大正十二年(一九二三年)生まれで、昭和二十七年(一九五二年)から茅ヶ崎で潜水漁に従事、松下国枝さんは、昭和七年(一九三二年)生まれで、昭和二十八年から茅ヶ崎で潜水漁に従事していました。天草に関する部分のみ引用します(文献2)。

「松下…アワビや天草も獲ったんですけど、最初は天草だったのね。天草にアワビにサザエにトコブシにウニにみんなそんなの獲ったの。」

聞き手…獲って来た物って言うのは例えば天草とかは、獲った物は自分たちでみんな干してそれで出荷するんですか？ あれも市場へ持っていくんですか？

松下…信州の方へ送るんです。

内藤…信州は心太の。

聞き手…あ、そうですね。

内藤…寒天。

聞き手…名物だから、あーそうか、変なもんですね。海から離れたところ。

松下…ねえ、全部いっぱい干してあるもんね。この間信州に行った時もやってあったけど。それでここいらで冷蔵庫入れても出来ないんですよねえあれねえ。」

『南湖郷土誌』には「テングサは一五〇二七尋の深いところに生えていて、やや赤みを帯びている。昭和初期頃、下町の清八船(三橋さん)が、小和田で持っていた磯の権利を買ってテングサを採った。潜水夫は静岡県の御前崎付近から雇っていた。その後規模を拡大し、ポンプを発動機にして、モグリも二人にした。採れたテングサはすぐ砂の上に干し、半日程度で干し上げる。乾燥したものは大きな袋に詰めて出荷した。出荷先は寒天作りの盛んな長野県の上諏訪だった。また、下町の和助丸(内藤姓)でもテングサを採取していた(文献3)」とあります。

二七尋は約五〇メートルですから、随分深いところで天草を獲っていたことになりそうです。深いところは当然危険を伴います。それでも、深い海に潜って天草漁をしていたのは、危険に見合う高値がついていたものと想像できます。

『南湖の漁業今昔』には、南湖の漁師の名、住所、漁法、船名

が一覧表としてまとめられており、「清八船」と「和助丸」が載っています。

「二艘張網・巾着網・機械もぐり漁 清八船 南湖五丁目・

(略) 三橋 正

磯物(天草)採

和助丸 南湖六丁目・

(略) 内藤秀雄(文献4)―

潜水漁は二軒しか掲載がないので、『茅ヶ崎市史研究30』の内藤貞子さんは、和助丸の内藤さんだと思えます。また、内藤さんの和助丸は潜水漁が主だったこともわかります。

本連載初回にご登場いただいた昭和九年(一九三四年)生まれの現役漁師さんからも、二〇二〇年十一月二十六日に和助丸の内藤さんの潜水漁について聞いたことがあります。潜水漁は二人で行い、船上からコンプレッサーを使って潜水服の頭部につながる管で空気を送っていたこと、鳥羽、真鶴との関係があったことです。

以上、これらの資料からは、かつて茅ヶ崎の海で天草の採集が盛んに行われ、長野県(信州)の諏訪へ送られていたことがわかります。

尚、『茅ヶ崎市史 通史編』には天草に関する記述はありませんでした。

図1(文献5)は茅ヶ崎の漁業がよくわかるグラフです。茅ヶ崎の漁業はほとんどがしらす漁です。しらすはいわし類の稚魚です。伊勢えびは刺し網漁で獲っています。天然の伊勢エビが茅ヶ崎で獲れていたとは驚きです。平成三十年(二〇一八年)八月に刺し網漁をする『音羽丸』さんに、同年十一月にしらす漁をする

『忠右エ門丸』さんに同乗させていただきました。拙稿連載のなかで、いつか刺し網漁やしらす漁を取り上げます。

先日発行さればかりの『統計年報』で、令和二年の茅ヶ崎の漁業を概観します(文献6)。全漁獲高一六六九二^{キログラム}のうち、しらすが一四八一一^{キログラム}で八八・七%を占めています。茅ヶ崎の漁業の特色です。

天草をテーマに書いていますので、茅ヶ崎の海藻について詳しく見ます。海藻類合計は四三三二^{キログラム}で全漁獲量のわずか二・五%です。海藻類は四項目に分かれています。内訳はわかめ類が二四一一^{キログラム}、ひじきが一八五八^{キログラム}、その他の海藻類が七三三^{キログラム}です。天草類の項目はありますが全年「一」となっています。つまり、最近では天草漁が行われていないと言うことです。統計表に天草の項目立てがあることに、かつて盛んだった天草漁の面影を感じます。

海藻類ではわかめが半分以上です。わかめは姥島の近くで晩秋から初春に養殖しており、「えぼしわかめ」の名称で販売しています。令和二年は平年より大分少なく、前年の約半分位の収穫量です。最近では海水温の上昇が著しく養殖がやりにくくなっていると漁師さんに聞いています。わかめは冬期に海水温が下がらないと成長しません。「幻のえぼしわかめ」と言われる日が来るかもしれません。図2は、「浜磯」さんが二〇一九年一月に姥島で収穫した天然のひじきです。茅ヶ崎の貴重な水産資源です。

3 寒天作業場

昨年、令和三年(二〇二二年)十二月二十七日に、長野県茅野市宮川の「五味喜二商店」の寒天作業場を訪問しました。所在地の説明です。国道二〇号線(甲州街道)は、甲府盆地を過ぎると

八ヶ岳方面に向かって次第に登りになります。釜無川沿いを走り、やがて長野県に入り急な登りの富士見峠を越え、さらに走ると諏訪盆地へ下り始めます。そこにある「坂室トンネル」が諏訪盆地への入り口です。このトンネルを抜けると、寒天づくりの「天出し」の風景を、国道の両側に冬期間見ることが出来ます。図3は、水田の上に作られた寒天の凍乾場（干し場）です。寒天はフリーズドライですから寒くないとできません。ただ寒いだけでなく、夜は氷り、昼は解ける寒暖差が必要です。この場所は、西に山が迫り「半日村」とも呼ばれ、他に雪がなくても、ここだけは積雪が見られる寒冷なところ。近年は、工場内で一年中寒天を大規模に作る会社がありますから、「天出し」で寒天を作っている場所は数少ないです。この地域でも、作業場が最近一つ減ってしまい、五つになったと聞きました。

昨年末の帰省時に国道二〇号線を外れて、煙突から煙が出ている建物を探しました(図4)。今回は「アポなし」の訪問でしたが快く従業員の方が対応してくださり、作業について説明を聞くことができました。

寒天づくりは十二月から二月中旬まで続き、大きく三つの作業工程に分かれています。「水車(すいしや)」「作業員一人」、「釜(かま)」「作業員二人」、「庭(にわ)」「作業員一五人」と呼ばれる三つの作業です。「水車」では海藻を洗い、「釜」では海藻を煮て、「庭」ではフリーズドライをします。出来上がるまでに全部で一〇日程かかります。

「水車」は、干してから運ばれて来た天草、オゴノリなどの海藻を水でもどし、洗ってごみや灰汁を抜く作業です。大きなドラムの中へ、水にもどした海藻を入れ、回転させ五〇分程かけて洗

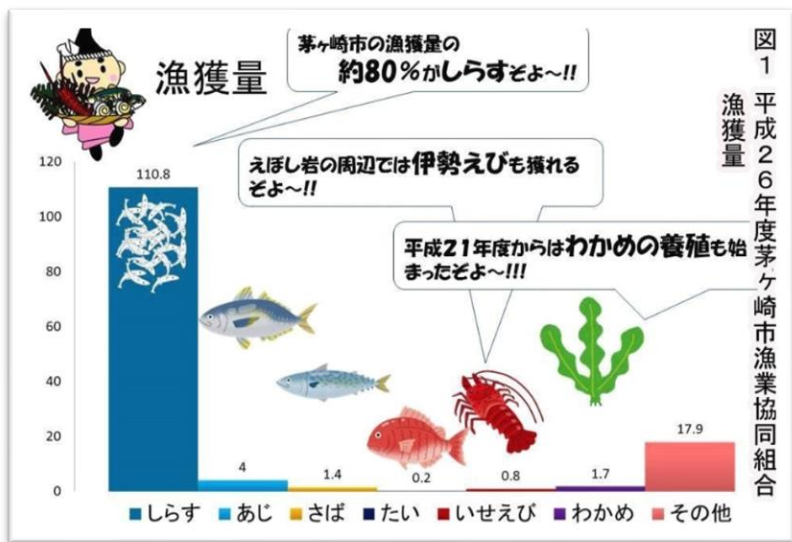
います(図5)。昔は水車を使っていたのでしよう。現在、海藻は千葉県、大分県やインドネシアから購入しているとのことでした(図6、7)。かつて茅ヶ崎から天草が運ばれていたことは、作業員の方はご存じありませんでした。水槽の水や水洗いには、大量の地下水を使っています(図8)。外気は刺すように冷たかったのですが、地下水は温かでした。良質の地下水が大量に出るのも、この場所の利点です。「釜」では、洗った海藻を屋内の釜で煮ます(図9)。煮て液状になったものを型に流し込んで、冷えて固まったら、四角に切ります(図10)。干し場に運び、屋外で藁の上に寒天を並べて乾燥させる作業が「庭」です(図11)。冬の信州諏訪の風物詩と言われた「干し場」の風景も、寒天の消費量の減少によりやがて消えていくのかもしれない。

4 おわりに

最後に再び羊羹の話題です。私の生まれ故郷の下諏訪町には「新鶴の塩羊羹」という銘菓があります。「新鶴」は「諏訪大社秋宮」の脇にある和菓子のお店です。「塩」と名がついていますが、とっても甘いです。午前中に売り切れになることもある人気商品です。今年は、六年毎(寅年、申年)に行く「天下の三大奇祭・御柱祭」の年ですから、観光で諏訪へ行かれる方もいらっしゃるのではと思います。ちょっと値段が高いですが、お土産に是非どうぞ。地元諏訪産の寒天を使っていると思います。

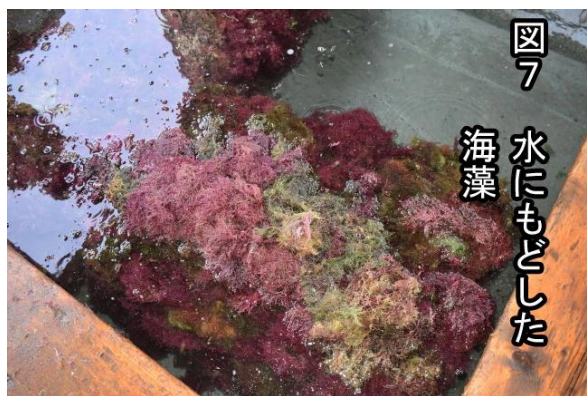
【参考文献・引用文献】

- 1 『信州寒天業発達史』矢崎孟伯 株式会社銀河書房 一九九三年 二二～二三頁



- 2 『茅ヶ崎市史研究30』茅ヶ崎市史編集委員会 二〇〇六年「イシタビュー」姥島の潜水漁に 従事して」 三五〜五三頁
- 3 資料館叢書11『南湖郷土誌』茅ヶ崎市文化資料館 一九九五年 五四・五五頁
- 4 『南湖の漁業今昔』三橋伊勢松 一九八七年 五、九頁
- 5 『姥島 烏帽子岩』茅ヶ崎市立西浜中学校 二〇一八年 五頁
- 6 『統計年報』茅ヶ崎市 二〇二二年 八三頁





『明治十二年 皇国地誌村誌』と『我が住む里』に見る姥島の記事

平野文明

(一)はじめに

標記の皇国地誌村誌小和田村の項(文献1)には、その冒頭に二三行にわたって「姥ヶ島」(以下「姥島」と記す)の記述がある。本稿は、この二三行が、小川泰一(泰堂)の『我が住む里』(文政十三年 一八三〇)(文献2)から引用されていることを考察するものである。

(二)『皇国地誌村誌』の姥島の記事

『茅ヶ崎地誌集成』(文献1)の七四頁から収録されている「明治十二年(一八七九) 皇国地誌村誌」小和田村の項(以下「皇国地誌村誌」と略記する)は次のように書き始められている。

印刷されている部分は原資料どおりの改行かどうか分からないが、丸数字で行番号を振り、印刷紙面のままの改行とした。なお、⑩行の読みは筆者、また⑳から㉓行は、⑲行目までと行頭位置を変え、さらに活字のポイントを落として印刷されている。

- ①島
- ②姥ヶ島又烏帽子岩尾根島トモ唱フ中央ヨリ西南々海岸ヲ
- ③距十八町五十間ニシテ本郡茅ヶ崎村トノ界ナル海面ニ
- ④突起シ兩村ニ属ス尤高キ岩ヲ元根又形ヲ以テ筆岩トモ
- ⑤呼フ七丈五尺アリ其西北々ニ属スルヲ鷗島西北ニアル
- ⑥ヲ鯖島東ニ接スルヲ大平ト唱フ東北東ヨリ東北隅ニヤ
- ⑦ノムネトツサカニ場島市場島ノ四岩連接セリ概シテ周

- ⑧回凡老里面積式千五百式十式坪トス海草ヲ摘魚貝ヲ漁
- ⑨スルニ便ナリ又西ニ東アカネ西アカネノ二小島アリ東
- ⑩南ニ西赤根東赤根目作根大塚根大根ノ五小島散在シテ
- ⑪波間ニ出没ス該島ノ眺望ハ雨降高麗富士足柄函嶺天城
- ⑫ノ諸山或ハ遠ク或ハ近ク西北々ヨリ西南ニ連列シ大島
- ⑬ノ噴烟ハ南ノ海雲ニ彷彿シ三崎ハ東南ニ遠ク江島ハ東
- ⑭南東ニ近シ江ノ浦袂カ浦相模川大磯小磯等ノ風景ハ東
- ⑮北東ヨリ西北隅ノ一瞬ニアリ佳観ト称シテ可ナランカ
- ⑯曩(さき)ニ尾根神社此島ニアリシカ慶(しげ)ニ暴風ニ破壊スルヲ以テ
- ⑰元祿年間本村ツト田ニ移ス今ノ姥母神社是ナリ歌ニ
- ⑱サガミナルコワダノウラノウバガシマタレヲマチツ、
- ⑲ヒトリネズスル
- ⑳或曰尾根ハ御根ニシテ本現ハレタルラン大山石尊ハ雨降ノ山頂崩シコ
- ㉑ノ国ノ地根ノ盤石ノ片端ノ終ニ其山骨ノ現ハレタルヲ石尊宮と祀ル
- ㉒サレバ山ニ在リテハ石尊海ニ在リテハ此御根ノ神社コソ本国ノ根元ト崇祀ス
- ㉓ヘキ理リカ云々

この二三行に続いて、

皇国地誌

村誌

相模国高座郡小和田村

と標題があり、以下本文が続いているが本稿では省略する。

右記の冒頭の文章について、同書三五頁の「解題」に次のように解説されている。

明治十二年の村誌のうち、小和田・菱沼村の村誌は、「神奈川県編纂主任星野東作 小和田邸菱沼村地誌 新倉李右衛門」の表紙で合冊された写本であり、村誌の記述の前に姥島に関する記述が二四行(ママ)にわたって追加されている。

皇国地誌村誌の冒頭の二三行は、本文である皇国地誌村誌小和田村の記述の前に綴じ合わせられているということである。そうであるならば、原資料の、二三行の部分と本文の部分は別に作られて綴じられた可能性が高い。

この二三行部分は問題を孕んでいる。それは⑩⑪行目の、昔、尾根神社はこの島(筆者注 姥島)にあったが、しばしば暴風に破壊されるので元禄年間(二六八〇〜一七〇四)に小和田村のツト田に移した。今の姥母神社がこれである。

という部分である。これを「尾根神社、遷移、変神説」とよんでおく。なお、『小和田郷土物語』(文獻3 四六頁)には、津戸田とするのは間違いで、正しくはツト田に隣接する小字の「長町」であると指摘してある。

この⑩⑪行は皇国地誌村誌の本文の姥母神社の説明(文獻1 七七頁)にも記されていて、一三行部分から転記したものと考えられることができる。

そして今日では、小和田の鎮守、熊野神社境内に祭られている姥母神社は、姥島にあった尾根神社が津戸田(実は長町)に移され姥母神社となり、さらに熊野神社へ移されたという理解が生じている(文獻5)。

筆者は「姥島の神三遷説批判」(文獻5)で、皇国地誌村誌の二三行部分にある「尾根神社、遷移、変神説」を否定した。執筆時点では、二三行部分と本文部分とは一続きのものとして理解していたので、二三行部分の⑩⑪行と、本文の姥母神社の説明ケ所(文獻1 七七頁)では共に「尾根神社、遷移、変神説」を説きながら、本文の尾根神社の説明ケ所(文獻1 七七頁)では、尾根神社は「村(筆者注 小和田村) 出口(筆者注 現出口町)ニアリ」と記してあることに矛盾を覚えていた。尾根神社が「村出口」に祭られているという記載を、「尾根神社、村出口説」と呼んで区別しておく。本文のこの部分には、尾根神社が姥島から移されたとは書かれてはいないのである。

繰り返しになるが、「尾根神社、村出口説」は本文のみにあり姥島からの遷移を説かない。一方「尾根神社、遷移、変神説」は二三行部分と本文にあり、遷移説である。このように二説あるのだが、二三行部分と本文を執筆したのは同一人物で、『茅ヶ崎市史集成』の「解題」にある「新倉李右衛門」ではないだろうかと筆者は考えている。

(三) 姥島近辺の根(岩礁)

尾根神社が姥母神社になったという記述は領き難いものであるが、姥島とその周辺に点在する根(島 岩礁)の名称を細かく記

載していることには資料価値が認められ、次のような点を指摘することができる。

一、「姥ヶ島」は「烏帽子岩」「尾根島」とも呼ばれ、この島には海面に突起している岩(「元根」「筆岩」)があるという記述から、姥島は突起した岩のある島の呼び名であることが分かる。

二、⑤行から⑩行には姥島の周囲にある根(島、岩礁)の名称をあげてある。一、鷗島(姥島の西北々にある)、二、鯖島(西北に)、三、大平(東に接する)、四、ヤノムネ(東北東より東北隅に)、五、トツサカ(同)ときか島、六、二場島(同)、七、市場島(同) 四岩連接、八、東アカネ(西に)、九、西アカネ(同)、一〇、西赤根(東南に)、一一、東赤根(同)、一二、目作根(同)、一三、大塚根(同)、一四、大根(同) 五島散在)である。ただ八、「東アカネ」と一一、「東赤根」、九、「西アカネ」と一〇、「西赤根」は、重複なのか同名の根が二つずつあるのかは判断が付かない。

姥島とは岩礁群も含めた呼び方だという理解もあるが、明治十二年のころは、あるいは地元では、それぞれの島(根)を呼び分けていたのである。最近では姥島を「姥島本島」と呼んだ例がある。岩礁群を含んで姥島と呼ぶと理解されるようになって、さらに姥島を呼び分けなければならなくなったことから生じたものであろう。

(四)『我が住む里』と『皇国地誌村誌』の姥島記事の比較

小川泰二(泰堂)の『我が住む里』は『藤沢市史料集』二一(文獻2 五三〜五四頁)に収録されている。すでに指摘されているの

かもしれないが、皇国地誌村誌の冒頭三行がこの文献に依っていることを筆者は最近知った。

該当する部分は次のとおりである。皇国地誌村誌の記述と比べるために印刷されているままの改行とし、行番号を付した。また(〜)は出典にある読み方、() は筆者が付けた読み方である。

①乳母島

② この海辺を西に去事一里ばかりにして、海中に岬々たる巖石突起す、その高さ七八丈、紆曲屈伸(うきよくくっしん)、豎に割たる

④法螺貝の片われを視るがごとく、奇観いふばかりなし、
⑤形に依つて、筆島とも呼、本名、御根と称し、尾根大明神
⑥を祀る、我考がふる一説あり、尾根ハ御根(おんね)にて、当相模

- ⑦国の根の盤石の、片はしの現はれたるならんか、大山石
- ⑧尊といふも、雨降山の絶頂の土崩れ、わずかにこの地盤
- ⑨の山骨あらはれたる、これを尊とみ、石尊宮と祀
- ⑩る、されバ山に在てハ石尊宮、海に在てハこの御
- ⑪根の御神こそ、当国の根本と崇めまつるべき道理
- ⑫なり、今ハこの社もたびたび風波に荒るゆへ、小
- ⑬和田上郷に遷す、この社内に、昔より伝へたる歌
- ⑭ 相模なる小和田が浦の乳母が寫誰をまちつゝ
- ⑮ 独寝(ひとりね)をする
- ⑯ この寫根、大小ふたつの大巖の根廻り広く、平岩

- ⑰・沓石・鯨通しなど名付るところ有て、その外高
 ⑱低の巖石海中に隠頭し、すべてこの裾岩の廻り一
 ⑲里有余と云り、長閑(のどけ)き春の汐干にハ岩根ひろくあ
 ⑳らはれ、鮑とる海士(あま)、榮螺(さざなみ)つく童子みなこ
 の磯
 ㉑の風景にして、東にハ絵の寫、鎌倉山、固瀬の漁
 ㉒村、西には富士、足柄、二児の山々、伊豆の岬、
 ㉓葉鳥(はしま)大寫まで、鷗の沖に遊ぶがごとく波間がく
 ㉔れに見わたり、誠に当国美景なれば、文雅の輩ハ
 ㉕弥生の比(ころ)を待て渡海し、巖間に酒をあたゝめ鮮魚
 ㉖を切て、吟詠するものも多しと聞り

皇国地誌村誌の冒頭二三行部分は、明らかに『我が住む里』の「乳母島」を参考にし、引用して書かれている。時代順に『我が住む里』をAとし、皇国地誌村誌をBとして対比させながら見てみよう。

(1) Aには、「乳母島」に「法螺貝の片われを視るがごとき」巖石が突起しているので「筆島」とも呼ぶが、「本名(ほんみやう)、尾根と称し、尾根大明神を祀る」(②〜⑤行)とある。岩礁地帯全体をいつているのではなく、突起する巖石のある姥島のことをいつているのである。尾根といえは、岩礁の一つひとつは全て尾根なのだが、なぜ姥島だけを「本名は尾根と称し」としたのだろうか。姥島に特異な形の突起した巖石があり、加えて最大の尾根であるからだろうか。筆者は、「本名は尾根と称し」の一文は、「尾根大明神」を案出するためのはからいではないかと考えている。

Bには、姥島は「姥ヶ島」「鳥帽子岩」「尾根島」ともいい、「海面に突起し」、その突起した岩を「元根」「筆岩」というのである。(②〜④行)。姥島とそこにある突起した岩を呼び分けているのである。②〜⑤行には、姥島の「本名」は「尾根」であるとも、そこに「尾根明神を祭る」とも書いてはいない。そして先に記したように⑤〜⑪行に周辺の「根」の名称を列記している。この部分は『我が住む里』にはなく、地元でなければ書けない事柄である。

(2) Aの⑤〜⑫行は、尾根(姥島)に尾根大明神を祭ることについて小川泰堂の独自の解釈である。

尾根は相模国の根の盤石で、大山の石尊宮は、山頂が崩れてその盤石(山骨)が現れたのを尊んで祭つたものである。一方、「海に在てハこの御根の御神こそ、当国の根本と崇(あが)めまつるべき道理なり」とある。尾根は相模国の盤石で、大山では石尊宮として祭られ、海では「尾根の御神」として「あがめ祭るべき」と言っているのだが、筆者には牽強付会としか思えない。

また、Bの⑳〜㉓行の小文字部分は、この部分をほぼそのまま転記したものである。

(3) A⑫⑬行に、その「尾根大明神」が「今ハこの社もたびたび風波に荒るゆへ、小和田上郷に遷す」とある。「小和田上郷」とは『小和田郷土物語』(文献3 七六頁)に次のように説明されている。なお、地名の読みは筆者。

「本宿の西隣に新宿(あらじゆく)の家並が形成されるに及んで小和田は行政上二つに分れ、上郷は新宿以西、下郷は本宿(もとじゆく)以東という形でそれぞれの名主によって治められるよう



小和田の熊野神社境内に祭られている姥母神社

になり、今に呼ばれている「境目」の通称は、その地が上、下の境界であったことを意味している。」

小和田地区は、家数が増える以前、東海道沿いの、西から坂下、

新宿、本宿、本宿から南に下って浜竹の四チヨウナイに分かれていた(文献6 三七頁)。「上郷とは新宿以西」とあるから坂下と新宿を指すと思われる。

江戸時代に「浜鎮守尾根大明神宮」が小和田村に祭られていたことは寛政十年(一七九八)の「小和田村明細帳」(文献7 二四四頁)に、また天保十二年(一八四二)の『新編相模国風土記稿』小和田村にも出ている。

ここで、文献毎にその記載するところを整理しておく。

1 寛政十年(一七九八)の小和田村明細帳、「浜鎮守尾根大明神宮 壱ヶ所」

2 文政十三年(一八三〇)の『我が住む里』「尾根大明神・尾根の御神 たびたび風波に荒るゆへ、小和田上郷に遷す」

姥母神社内の姥神



相州高座郡大庭庄小和田

村宿

3 天保十二年(一八四二)の風土記稿小和田村、「尾根明神社 祭神詳ならず」

4-1 明治十二年(一八七九)皇国地誌村誌、二三行部分⑩⑪行、「尾根神社 塵(しばしば)暴風ニ破壊スルヲ以テ元禄年間本村ツト田に移ス今ノ姥母神社是ナリ、」

4-2 同書本文の尾根神社の項(七七頁)「尾根神社 村出口ニアリ、傍に碑アリ」

サガミナル(以下略)」

4-3 同書本文の姥母神社の項(七七頁)「尾根明神の社 風波ニ数度破壊セシヨリ本地(筆者注 ット田。しかし正しくは長町。)に移セシモノトス」

2が姥島↓上郷の遷移説で、4-1と4-3は姥島↓ツト田に移されて姥母神社に変神の「尾根大明神、遷移、変神説」である。1と3と4-2は姥島からの遷移を記さない。1と3には場所の明記がないが、4-2と同じ「村出口」（現在の出口町）であろう。2も加えて「尾根神社、村出口説」である。

「村出口」は、文献3（七四頁）に「以前は通称大明神と呼ばれた地（松浪小学校の西北方、現在出口町）」とあり、筆者の聞き取り（文献6 六三頁）では「出口町二二の二二にあった千手山の麓」とある。両者は同じ場所である。地図では文献6の三五頁に示されている。ただ、昔はこの地に人家がなく、右記の四つのチョウナイの外だったようである。しかし坂下、新宿の南にあたるので上郷と呼ばれていたのかも知れない。

『我が住む里』は、尾根大明神を移した先を「上郷」とし、同じ遷移説でも、「ツト田」とする皇国地誌村誌と違いがある。小川泰堂が『我が住む里』を執筆したとき、「上郷＝村出口」に祭られている尾根大明神は姥島から移されたと考えたのは、姥島も尾根の一つであり「尾根大明神」も同じ名前を持つものであったからと筆者は解している。

一方、皇国地誌村誌が、尾根神社はツト田に移され姥母神社になったとするのは、姥島の「姥」と、姥母神社の「姥」が同じ文字であるからであろう。皇国地誌村誌の執筆者は、小川泰堂の説を尊重し、尾根大明神は姥島から移されたと考えていた。しかし姥島に祭られていた神を移したのなら、当時ツト田（正しくは長町）に祭られていた姥母神社だと考えたのだろう。誤りを深めたことになる。現在、熊野神社に祭られている姥母神社が、明治十二年には長町にあったことを認めるのは幸いである。

(4) 皇国地誌

村誌二三四行部分の⑩行に、尾根神社がツト田に移された年は「元禄年間」とあることの根拠は不明である。ちなみに『我が住む里』は尾根大明神を上郷に移した年には触れていない。

皇国地誌村誌の本文七七頁に、姥神の「祠柱二元禄八年乙亥（一六九五）十二月吉祥日相州高座郡大庭庄小和田邸ト刻セリ」とある。これが二三行部分の「元禄年間」移設説の元である。熊野神社境内の姥母神社には石造の姥神が祭られており、そのデータは『茅ヶ崎の石仏 3 松林地区』（文献8 一三六頁）に記録されている。「相州高座郡大庭庄小和田邸」の銘はあるが、「元禄八年云々」の刻銘は見当たらない。この年号銘をどこから持ってきたものか、今のところ分からない。

(5) 最後に姥島の歌について。
『我が住む里』の⑬～⑮行に、上郷に祭られている尾根大明神の「社内に、昔より伝へたる歌 相模なる小和田が浦の乳母が寫誰をまちつゝ独寝（ひとりね）をする」があると記されている。この記述から、歌は、『我が住む里』が作られた文政十三年（一八三〇）以前に詠まれたものであることが分かる。断定はできな



姥島の歌碑

いが、当時既に歌碑となっていたのだらう。現在この歌碑は熊野神社境内の姥母神社の脇に立てられている。

「皇国地誌村誌」の⑰⑸⑹行にも同じ歌が記されているが、その場所も、歌碑であるかどうかとも書かれていない。しかし、皇国地誌村誌本文(文献1 七七頁)には「尾根神社 雑社西北西村出口ニアリノ傍ニ碑アリサガミナルコワダノウラノウバガシマタレヲマチ、(ママ)ツ、ヒトリ子ズル」とある。明治十二年には「村出口」に祭られている尾根神社の傍らに歌碑があったことが分かる。

筆者は「乳母島の神三遷説批判」(文献5)で、皇国地誌村誌本文の、歌碑は「村出口」の尾根神社の傍らにあるという記事を「これは正しくない」としたが、これをここで撤回しなければならぬ。歌碑は、文政十三年にも、明治十二年にも「上郷Ⅱ村出口」の尾根大明神の傍らに立っていたのである。

さらに「乳母島の神三遷説批判」に「歌そのものが作られたのも、皇国地誌村誌が作られた明治十二年だった可能性が高い」と記したことも撤回しておく。

姥島の歌とよく似た歌が大和市福田に伝わっている。

相模なる福田ヶ原の山姥は

いつにいつまで夫(つま)や待つらむ

樋田豊宏氏はこの歌を「姥島碑と姥供養碑」(文献9)に紹介して、姥島の歌と似通っていることを指摘している。歌を樋田さんが見たのは、大和市福田の共同墓地に立っていた姥供養碑で、表面に「姥供養碑 昭和五十年建立」、裏面に山姥の伝説が刻されていたと記している。今は大和市役所などの印刷物に収録されていて、歌も伝説も少しずつの違いがあるが、村人に危害を加える

山姥を退治したところ、その亡霊が夜々現れるので、中原街道を通りかかった徳川家康が先の歌を詠んで姥の怨霊を慰めたというも話である。村人が姥の尊像として作ったという「木造優婆尊尼座像」が市指定重要文化財になって蓮慶寺に祭られている。大和市福田に伝わるこの歌が、茅ヶ崎の姥島の歌に通じていることに興味を覚えるが、蓮慶寺の優婆尊尼(うばそんに)の像が、本市に三体ある姥神の石像とも似ていることにも興味を覚える。

(五) 最後に

熊野神社境内に明治二十二年(一八八九)建立の石碑に、「日吉神社・天照皇大神・尾根神社」の銘がある(文献8 二四五頁)。

尾根神社は、碑が建てられる年までは「小和田村出口」に祭られていたものと考えられる(文献5)。漁業に関する神だったのかも知れないが、地元信仰は絶えていて詳しいことは分からない。

姥島も含め、その周囲の岩礁を「尾根」と呼ぶので姥島に祭られていたのだらうという推測はできる。しかしそのことを示す根拠は見つかっていない。荒れば渡ることができないう姥島に祭り、そこから移したということはなからうと筆者は考えている。

文政十三年に小川泰堂は『我が住む里』



熊野神社の多神名碑

に、小和田村上郷に祭られている尾根大明神は姥島から移されたものと記した。これをもとに、明治十二年の『皇国地誌村誌』は、村内小字「長町」に祭られている姥母神社は、姥島に祭られていた尾根神社を元禄年間に移したものと断じた。小川泰堂の考へは一つの推測だから一概に否定もできないが、皇国地誌村誌の述べていることは飛躍が大きく、混乱の元となつてしまった。足柄山の金太郎を育てた山姥の伝説があるように、本県は姥神信仰の伝承が根強く残る地域の一部分である。姥島にこの姥神信仰の片鱗が残されていないか、興味のそそられるところである。

【引用・参考文献】

- 1 茅ヶ崎市史料集第三『茅ヶ崎地誌集成』所収 二〇〇〇年茅ヶ崎市刊
- 2 『藤沢市史料集』二所収 一九七六年藤沢市文書館編集・発行
- 3 嶋善太郎著『小和田郷土物語』一九八九年 自刊
- 4 「湘南茅ヶ崎えぼし岩 烏帽子岩まるわかりガイド」二〇二一年 えぼし岩の自然体験教室実行委員会発行
- 5 筆者記「姥島の神三遷説批判」『郷土らがさき』一五二号所収 二〇二一年九月一日茅ヶ崎郷土会刊
- 6 筆者記「小和田の民俗」『茅ヶ崎市文化財史料集』第九集所収 一九八三年茅ヶ崎市教育委員会刊
- 7 「小和田村明細帳」『茅ヶ崎市史』1資料編上所収 一九七七年茅ヶ崎市刊
- 8 資料館叢書15『茅ヶ崎の石仏 3 松林地区』二〇二〇年茅ヶ崎市文化資料館刊

- 9 樋田豊宏「姥島碑と姥供養碑」『郷土らがさき』一三三号所収 一九七八年九月一日茅ヶ崎郷土会刊
(令和四年四月二十日記)

あなたの力を郷土会で生かしませんか。

人生100年時代に突入です。長い〜余生です。喜ぶべきか、悲しむべきか、問題です。

若者ならそのための準備が今から必要。高齢者なら認知症予防と体力維持の努力が必要。郷土会に入ると両方可能です。

そこで結論！“**充実余生は郷土会**”

郷土会の会員は80名ほど 年会費1500円 入会は 氏名・住所・電話番号・(メールアドレス)・申込日を記して年会費とともに会員及び役員へ

会長 平野文明の携帯 090-8173-8845

固定電話 0467-5312453

足腰鍛えて、茅ヶ崎や近隣の歴史・史跡・文化財などを訪ねていきます。

脳みそ鍛えて、歴史や民俗の勉強会、会報『郷土らがさき』の発行などを行っています。

風

自由投稿欄

たのしみは……

前田照勝

ウクライナのニュースに接する度に、出口の見えない暗いトンネルに迷い込んだ心地になる。このような状態が続くとストレスをいっぱい抱えるようになる。耐えられなくなると心身に異常をきたしかねない。辛い悲しい出来事を、自分のことのように受け止めてしまう状態を共感疲労というのだそう。

今朝の夢は恐怖体験そのものだった。夢の中身は次のようなものである。

舞台は、すでに廃校になった栃木の山奥の小学校である。

母校の校庭の端には大きなケヤキが聳えていた。教室には大勢の避難民がひしめきあっていた。校舎の周りには多くの黒い軍服を着た兵士がピストルを構えている。銃口を向けられたときには冷や汗が出た。「敵がこの中に居るぞ!」。誰かの叫ぶ声に避難民がざわつく。人々の悲鳴や子供の泣き声が聞こえる。あまりの恐怖に目が覚めた。

子どもたちのところに遊んだ小学校に、敵がやって来た。それは平和な街にロシア兵が侵略してきた映像と重なったのだ。その場面がすぐに夢に出てくるのだから単純である。夢にせよ、撃たれるかもしれないと思ったあの怖さは今も覚えている。

朝の散歩から戻って、庭や花壇に水やりをする。今は盛りと花々が咲き誇っている。これらを写真に残そうと思いついた。

白ヤマブキ、白タンポポ、チューリップ、ムサシアブミ、イチハツ、シヤガ、ニリンソウ、ミヤコワスレ、ハナイカダ……。

花たちが笑顔でこちらを向いている気がした。シャッターを押しながら、少しずつ心が癒されていくのを感じた。

花は人の心を救う魔法の力を宿しているのだろう。

やさしい気持ちで周囲を見れば、多くのたのしみや喜びをみつけられると思う。

たのしみといえば、十八年も前のこと「たのしみは」から始まる短歌を綴ったことがある。その数は六百首を超えた。そんな記憶が蘇った。

「たのしみは」で始まる短歌は、江戸末期の歌人の作である。橘曙覧（たちばな あけみ）文化九〇慶応四年（一八二二）六八は、クリントン米大統領が日本の天皇・皇后両陛下下の訪米の際の歓迎スピーチの中で次の一句を引用したことで広く知られた人物である。その句は、橘曙覧の著書『独楽吟（どくらくぎん）』の中にある。

たのしみは 朝起きいでて 昨日まで

無かりし花の 咲ける見る時

小さなことに楽しみをみつけ、清貧に生きた歌人の心境に共感した。それに倣って自分も続けてみただけのことである。

参考図書 神一行著『「たのしみ」な生き方 歌人橋曙覧の生活法』角川文庫

暗いご時世だからこそ、昔を思い出して「たのしみは」で始まる自分の歌を作ろうと思う。幼稚な発想でいい。「たのしみは？ たのしみは？」と問い続けると、前向きな気持ちになるから不思議だ。一度でいいから試して欲しいものだ。

次は自分の最新作である。

たのしみは 今年も元気な ムサシアブミ

新芽の色の 輝(てる)を見るとき

たのしみは エサに群がる スズメたち

今日も聞こえる ありがとこの声

たのしみは 草地耕し ハマヒルガオを

広げる作業 続ける日々よ

たのしみは 意識不明の 弟よ

手が動いたとの 知らせに涙

弟は今年の一月十三日の早朝に交通事故に遭い、救急車で東海大学病院へ搬送される。脳内出血を防ぐために頭蓋骨を切開する。元へ戻す手術に成功したが、まだ意識は戻っていない。その知らせだった。涙ながらに明日へのたのしみをみつけたい。



2022.04.13
ミヤゴフスレ



2022.04.10
イチハツ



2022.04.15
ハナイカダ



2022.04.11
ムサシアブミ

茅ヶ崎郷土会寄贈の写真を中島自治会館に掲示

羽切信夫

中島自治会館の二階大会議室に、茅ヶ崎郷土会が「令和三年度茅ヶ崎市民文化祭」に参加して、市役所一階に展示した写真の一部が掲示された。この会議室には写真や絵画は皆無だったので異彩を放っている。

展示に至った経緯は、コミュニティセンター湘南(コミセン湘南)が令和三年度の事業として、講座「地域の歴史を知ろうー郷土中島の歴史を学ぶ」を企画し、二月二十三日、三月二日、同九日の三回、座学と中島のまち歩きを行った。講師は平野文明茅ヶ崎郷土会々長が務めた。参加者は中島地区の住民を含めて毎回約四十人が参加して盛会だった。

この講座の期間中、市民文化祭に展示した写真の中から、中島地区に係る写真パネルをコミセン湘南の一階フロアに展示したのである。

この写真パネルを、渡辺又雄さん(コミセン湘南会計担当、中島在住)が、「中島自治会で譲り受けて自治会館に展示したらどうだろうか」と、塩崎中島自治会長に進言し、塩崎さんからコミセン湘南においてお願いして寄贈を受けたものである。展示された写真の幾つかを紹介します。

①中島の鎮守日枝神社 地元では慶安二年(一六四九)創建と伝えられている。江戸時代の記録は「山王社」で、明治初年の神仏判然令で名前を変えた。祭神は大山咋神(おおやまくいのかみ)。滋賀県大津市の日吉大社が総本宮である。江戸時代に中



島村の領主だった山岡氏は近江の出身なので、創建に関わっていたのかもしれない。

②「山王」銘の日枝神社の扁額 日枝神社の拝殿に「山王」と彫られた扁額



山王銘扁額（おもて面）

景忠「筆者 大角圓順」とある。七代景忠が子孫繁昌と極楽往生を願って奉納したものである。

③浄林寺の供養塔 本堂裏の墓地に、庶民の墓石が出現するところに建てられた供養塔があり、「元和九年（一六二二）癸亥（みずのとい）年八月廿日 欽覺善心禅定門靈 施主」 「一」とある。

今のところ中島で最古の遺物と思われるが、「欽覺善心」が誰なのか不明で、また摩滅していて施主の名前が読めない。

④左近右近稲荷社 一つの祠に左近と右近、二社の稲荷を、東チヨウ、西チヨウで交代に祭っている。洪水で流されて、旧地

が掛かっている。「山」の文字は特異の書体となっている。縦七〇センチ、横四六センチの大きさ。裏面に「子孫繁昌 頓生（ママ）菩提 時之領主山岡氏



浄林寺の供養塔
元和九年（一六二二）
の年銘がある

に戻りたいというので戻したという話があるが、弘化三年（一八四六）に京都の伏見稲荷を勧請したという記録もある。

⑤相模川橋梁（鉄橋）の跡 明治一〇年（一八八七）、横浜―国府津間に鉄道が敷かれた。これに合わせて相模川に鉄橋が架けられたが、大正十二年（一九二二）の関東大震災で倒壊した。その跡が残っている。

⑥東チヨウのサイノカミ 中島は四つのチヨウナイに別れていて、それぞれサイノカミ（道祖神）を祭っている。東チヨウの像は双体立像で、江戸時代に作られたものだが摩滅していて文字は読めない。小正月にサイトヤキが行われている。

（二〇二二年四月二十日記）

茅ヶ崎郷土会から

第一九九回 史跡文化財めぐり報告

藤沢市四ツ谷から茅ヶ崎市赤羽根、菱沼までの大山道

を訪ねる

平野文明

令和三年十二月十一日(土)実施 参加者 一八名

コロナ禍がなかなか治まらないことから、茅ヶ崎郷土会も事業の数を減らしています。感染者数が減少した折を見て、大山道(田村通り大山道)の始まりの部分を訪ねました。気持ちよく晴れ渡った小春日の半日でした。

田村通り大山道

藤沢市の四ツ谷から入って伊勢原市の大山に通じる道は、江戸時代に、相模川を田村の渡しで渡ったために「田村通り大山道」と呼ばれていました。今はほとんどが県道四四号藤沢伊勢原線となっています。四ツ谷から大山を目指して歩き始めると、間もなく茅ヶ崎市の赤羽根・小和田・菱沼地区に至ります。見学の説明は山本会員がとめました。

① 三ヶ所の大山道入口(城南二丁目)

藤沢市四ツ谷付近で大山道に入るには三つの入口があります。一つは観音霊場供養塔口、二つ目は二ツ谷稲荷神社口、三番目は四ツ谷不動堂口です。





この日の参加者

①の1 観音霊場供養塔口には、「奉巡禮西國坂東秩父供養塔」
 (享和三年一八〇三銘) が立っており「あふり山わけいる道にし
 おりおく 津ゆのことはしるべとはなれ」の歌が刻んでありま
 す。三ヶ所のうち最も西側で、茅ヶ崎と藤沢の市境に位置しま
 す。「あふり山」は「雨
 降山」、大山のことと
 す。不動明王を拝むた
 めに東海道を上つて来
 た導者たちが、四ッ谷
 の入口を通り過ぎて
 も、ここも入口だとい
 うことを表している歌
 だと伝えられています。

①の2 ニツ家稲荷社

口はさらに藤沢方面へ
 約一〇〇ほど進んだ
 稲荷神社脇から入りま
 す。しかしこの道路
 は、昭和二十三年の地
 形図(文献1 五三頁)
 にはなく、同四十三年
 の地形図(同書 五三頁)
 にはあるので江戸時代にはなかった入り
 口です。

①の3 有名な四ッ谷不動堂口です。さらに国道一号を藤沢方面
 に進みますと、東海道(旧一國)と新国道一号が斜めに交わる交



あふり山わけいる道にしおりおく
 津ゆのことはしるべとはなれ



差点に出ます。この交差点の新一国の西側に不動堂があります。旧東海道の藤沢方面から見れば真つ正面です。江戸などから来た導者は直進して、ここ不動堂口から田村通り大山道に入りました。

江戸時代にはここに、大山導者を当て込んだ茶屋が並んでいて、「四ッ谷の立て

場」と呼ばれていました。広重の浮世絵に「大山みち追分」と彫られた道標が立ち、立て場に茶屋が並んでいる様子が描かれています。屋根の下に道標があります。「大山道」と彫られた石柱にお不動様が座っていることから不動堂口と呼ばれていて、その右側から大山道が始まります。道々に同じような形の道標があるので、お不



動様に導かれて大山までたどることになりま

す。奥にあるのは阿夫利神社への一の鳥居で

す。最初の鳥居は万治四年(一六六二)に木造で建てられたそうです。天保十一年(一八四〇)に石造で建てられ、関東大震災で倒壊し、昭和三十四年(一九五九)に再建されました(文献②)。鳥居の貫に掛かっている天狗面は再建時に掛けられたものですが、その後落下し、大事な鼻が折れています。

屋根の下のお不動様の道標は延宝四年(一六七六)に江戸の大山講中によって建てられました。またここには万治四年に建てられ、天保六年(一八三五)に再建、大地震で倒れ再度再建された別の道標もありましたが、今は大山に移されています。万治四年には木製鳥居と初代道標が建てられているので、大山詣りを大いにPRした年だったのでしょう。

②右野みちの句碑と地藏尊(城南二丁目)

大山の一の鳥居をくぐり、いよいよ大山道に入ります。先が二つに分かれるところに祠の中の地藏尊とその脇に小さな句碑があ



ります。地蔵様の台石に「右のみち」、「左大山道 享保二年(一七一七)」と刻まれていたそうです。(文献3 一一〇頁)。
脇の句碑には「右野道／地蔵も花も笑ひけり／蕉風」とあります。蕉風は茅ヶ崎市萩園の故菊池正平さんです。碑の裏面に「昭和五十三年十月一日／茅ヶ崎郷土会／茅村筆」とあります。茅村(ぼうそん) はやはり茅ヶ崎市の書家の故水越咲七さん。郷土会が盛んだったころの建碑です。

③赤羽根の阿弥陀堂跡と、その開基の供養塔

大山道から離れて北に向かい、まず阿弥陀堂跡を見学しました。自動車の通りが多い細い道で、道に沿った崖の高いところに新しい六地藏と江戸時代の古い墓石が二基立っています。向かって右は専求比丘のもので、『新編相模国風土記稿』赤羽根村の項に「阿弥陀堂のご本尊は恵心作で、お堂は専求比丘(寛文七年(一六六七)十二月寂す)の造立する所」とあります。その横は

専口大徳の正徳三年(一七二二)の墓石です。専求比丘の墓石は固い安山岩製の板碑型です。当地に庶民の墓石が出現する頃のもので貴重です。今は阿弥陀堂はありません。

④宝積寺 野村もと子の墓碑と顕彰碑(赤羽根二〇四)

村野もと子と現代風の名前ですが江戸時代に生きた女性です。赤羽根の宝積寺の境内に、彼女の顕彰碑があり、次のように刻字されています。

(表面)

長閑なる 雨の名残りの露なるに おりてかざらん山桜花
妙染一貞法尼顕彰碑

(裏面)

野村もと子幼名直(生年不詳)天保八年九月一日 一八三七年没)は上赤羽根村名主小沢家の娘であって、歌の師加藤千蔭の門下に入り、春夏秋冬恋歌六十九首の短歌一首の長歌を編した。「もと子家(ママ)集」を天保六年(一八三五年)四月刊行。当時の女流歌人として豊かな教養知識をもって歌才を認められる。

昭和五十五年(一九八〇年)「かながわの一〇〇人」に女流歌人として選ばれる
昭和五十七年十一月吉日

小沢家十八代 小沢卓一／ 長男 雄市 建立
宝積寺四十世 大活俊雄／ 雲外良憲 敬書



「かながわの100人」に選ばれたときに建てられた顕彰碑です。碑文は『茅ヶ崎の記念碑』(文獻4 三三二頁)から引用しました。

本堂の裏手

に小沢家の墓地があり、その中にもと子の墓碑があります。向かって右側面に、顕彰碑に刻されている同じ歌があります。墓碑正面の戒名は傷んでいて読めません。同書には、この墓地の中に、もと子の母 白羊、もと子の兄 飯哥の墓石と、鳴立庵四世の百明が歌と句を寄せた飯哥・もと子の兄弟と思われる聡悟禪童子の墓石も紹介されています。

⑤西光寺 大山石燈籠と半鐘(赤羽根三三三)

大山石燈籠 かつて市内の村々で、献燈のために七月下旬から八月半ばまで「大山灯籠」と呼ぶ組み立て式の灯籠を立てる風習がありました。この大山灯籠を石で作り、常置したものが本市の大山道沿いに二基残っています。その一つが、西光寺の山門脇にあります。西光寺は大山道から少し離れています。この石燈籠はかつては道沿いにあつたと伝えられています。

半鐘 茅ヶ崎では最も古い「元禄二年」(二六八九)の年銘を持つところから市の重要文化財に指定されています。太平洋戦争中に供出させられました。西光寺と書いてあ



つたために寺に戻ることができたとされています。

銘に「菩提のために江戸の同行、寄進」とあり、作った鋳物師も江戸の人物であるところから、この鐘の造立に、江戸の大山講中が関係していると考えられます。

鐘の銘は次のとおりです。(／は改行ケ所)

赤羽根／西光寺／奉寄進半鐘

相州高座郡赤羽根村／迎接山西光寺十三世／浄蓮社欣誉單信

上人

為菩提江戸同行寄進

元禄二己巳年二月日

武州江戸住御鑄物師／田中丹波藤原／重行作

薬師堂跡から移された石仏群 かつて下赤羽根に薬師堂がありました。その境内にあつた石仏群は平成十六年に西光寺に移されました。薬師堂は『風土記稿』赤羽根村の項に



「西光寺持ち、慶安三年(二六六〇)然誉建立す」とあります。移された石仏は寛文五年(二六六五)銘の庚申塔をはじめ、徳本名号塔、二十三夜塔、弘法大師座像などです。『茅ヶ崎の石仏3松林地区』(文献5)の赤羽根の項にこれらの石仏の個々のデータが収録されています。

⑥長福寺 文学碑と七里役所役人などの墓(松林三町目)
西光寺を辞して、国道一号のバイパスの下をくぐり菱沼の長福寺に着きました。

文学碑 境内に数基の句碑、歌碑があります。画像はその中の唾蟬坊(あぜんぼう)の句碑です。添田唾蟬坊、名は平吉。演歌師と紹介されています。塩原富男著『ふるさとの歴史散歩』(文献6三八頁)に、妻の実家が長福寺の檀家、句は一九五六年、唾蟬坊の十三回忌に手ぬぐいに染めて配られたものとあります。揮毫は「右野みち」碑で紹介した書家水越茅村です。石はフグの形をしています。

同書には、この碑のほかに大山古道吟行の句碑、鳴立庵



芳如の句碑、水越梅二の結願歌碑などが紹介してあります。七里役所役人などの墓 七里役所とは、江戸時代に尾張藩、紀州藩が江戸と領国を結ぶために七里毎に独自の継立所を設けたもので、本市では菱沼村の東海道沿いの「ぼたもち立て場」に紀州藩のそれがありました。当地で亡くなった役人や家族の墓が、立て場近くの須田家に残っていたものを、大正の中頃長福寺に移したと『ふるさとの歴史散歩』(文献6四六頁)に書いてあります。四基ある墓石の一基は童子のものです。

⑦長福寺南の石仏群

長福寺の本堂前を境内墓地に沿って南に進むと三叉路に当たります。その少し



小高い場所に庚申

塔二基、馬頭観音

と地蔵菩薩各一

基、古い墓石二基

が立っています。

また、道路を挟ん

だ反対側にはサイ

ノカミ(双体道祖

神塔)一基が祭ら

れています。

最近は道路整備

などで多くの石仏

が移設されていま

すが、以前は四つ

辻、三つ辻に立て

られることが多か

ったようです。道

の辻はおのずと人

が多く行き交いま

す。昔の人はこの

ような所には霊

魂、亡魂も集まると考えて、それらを鎮めるために石仏を建てた

と民俗学では解説しています。長福寺南のこの一画は、かつての石仏の祭り方を今もわずかに留めている場所です。

最後に

長福寺南の石仏群を見て私たちは解散し、茅ヶ崎郷土会第二九

九回史跡文化財めぐりは無事に終了しました。

この報告で使用した写真画像は前田会員と筆者が撮影したものです。

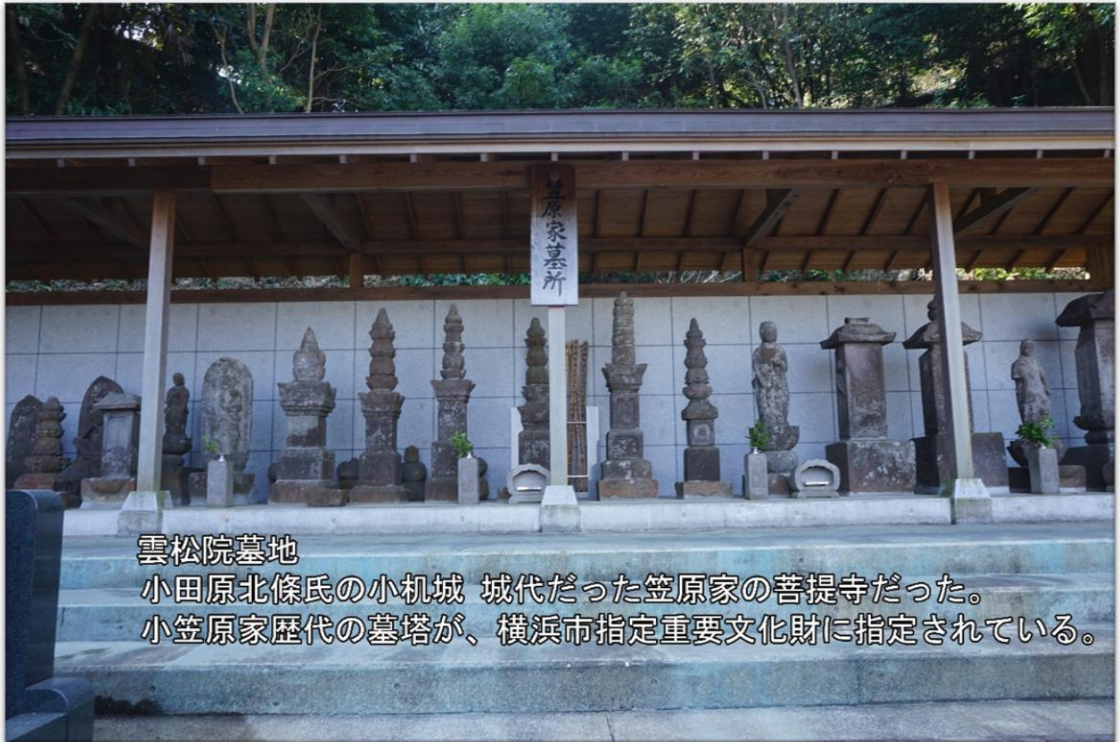
この史跡文化財めぐりの概要は、茅ヶ崎郷土会のホームページでも公開しています。

【参考・引用文献】

- 1 茅ヶ崎市史現代7 『地図集 大地が語る歴史』茅ヶ崎市一九九四年刊
- 2 高野修著「相模大山講と藤沢」藤沢市文書館一九八六年刊 『藤沢市史研究』19所収
- 3 資料館叢書12 『地名が語る赤羽根のむかし』茅ヶ崎文化資料館二〇一四年刊
- 4 資料館叢書10 塩原富男著『茅ヶ崎の記念碑』茅ヶ崎文化資料館一九九一年刊
- 5 資料館叢書15 『茅ヶ崎の石仏3 松林地区』茅ヶ崎文化資料館二〇二〇年刊
- 6 塩原富男著『ふるさとの歴史散歩』茅ヶ崎郷土会一九八三年刊

(令和四年四月十七日記)





雲松院墓地

小田原北條氏の小机城 城代だった笠原家の菩提寺だった。
小笠原家歴代の墓塔が、横浜市指定重要文化財に指定されている。

対岸で、小机城を攻め落した太田道灌が陣を敷いた亀ノ甲山（かめのこやま）といわれ、います。本堂からはお彼岸が近いからなのか御詠歌が聞こえていました。

雲松院を出て大通りを左に進み右折して踏切を越え



小机城址遠景

るともう小机城址が見えます。

② 小机城址

鶴見川に突き出た丘陵上の要害で、十五世紀半ば頃（室町時代）までには築城されていたと言われています。文明八年（一四七六）の長尾景春の乱による戦乱時には、景春に味方する矢野兵庫介が城を守っていました。が、文明十年（一四七八）太田道灌によって攻め落とされました。十六世紀に入ると北条氏綱により小田原北条氏の重要な軍事拠点となり、城も改築されたようです。城主は北条一族がつなぎましたが、笠原信為一族が現地で城代となり支配していたようです。

豊臣秀吉の小田原攻めでは小机城に戦闘記録はなく、徳川家康の関東入り後に廃城となります。四代目城代の笠原重政は家康に

小机城址の空堀を歩く



たいと思ったのですが、そこは案内の手前何事もないように進みました。駅に戻る途中の農家にしだれ梅や紅白梅、早咲き桜も咲いているのどかな風景でした。

小机駅から北に二駅、中山駅で市営地下鉄グリーンラインに乗り換え、予定より少し遅れてセンター南駅につきました。各々弁

旗本として仕え、武蔵国都筑郡台村に領地を与えられ二百石の処遇を受けたと言われます。

城址公園を登り始めてすぐの根小屋でしばし休憩の後、空堀、馬出(うまだし)、土橋を渡り冠木門をくぐると本丸広場に出ます。そこから空堀通路の下り登りを見て、その高低差に周回通路だったのを忘れ引き返し

茅ヶ崎城遠景



当を買い前方に見える茅ヶ崎城址に向かいます。

③ 茅ヶ崎城址

早淵川中流の南岸、城山(じょうやま)と呼ばれた舌状台地の先端部に築かれています。六つの郭と空堀や土塁からなる中世の丘城で遺構が良好な形で残されています。築城時期は小机城と同じ時期と思われる。駅から真つ直ぐに城址の麓(土塁)に差し掛かると、反時計回りに三分の一ほど回った北郭の下が整備された城址公園の登り口になっています。階段を登り北郭から中郭の広場に出ると早速の弁当です。城跡の各所は発掘調査が行われて、方々に説明板が設置されて解りやすくなっています。昼食後各自で見学してもらい、次の大塚・歳勝土遺跡に向かいました。



なお、この城跡のある場所は江戸時代には茅ヶ崎村といいました。私たちが住む茅ヶ崎市にも同じ文字の「茅ヶ崎村」がありました。今の市の名前はこの村の名を引き継いだものです。同じ名前だった両方の土地を比べてみたいという

のも茅ヶ崎城址を訪ねた理由の一つでした。ところが来て見ると、横浜の茅ヶ崎村だったところは開発が進んで昔の面影はありませんでした。

④ 大塚・歳勝土遺跡

昭和四十七年(一九七二)に港北ニュータウンの開発に伴う事前の発掘調査で明らかにされた。大塚遺跡は高台に作られた弥生時代の環濠集落で、歳勝土遺跡からは方形周溝墓群が発見され、



大塚遺跡と同時代と確かめられたことから大塚遺跡に住んだ人々の墓地であることが明らかになった。その結果昭和六十一年(一九六六)一月三十一日に国史跡に指定された。現在は両遺跡の東側三分の一にあたる約三万三千平方メートルが保存されているが大塚遺跡の中央部及び西側は開発によって高台ごと削り取られている。Wikipedia
ちなみに茅ヶ崎市の国指定史跡下寺尾西方遺跡は同じ弥生時代で、南関東最大の環濠集落と言われています。

丘上に復元された竪穴住居址を見学に向かう途中、登り切った広場(歳勝土遺跡)で力尽き後を平野会長に任せてベンチに休みました。申し訳ありません。

横浜市歴史博物館



今回は時間の関係から見学しない計画でした。大塚遺跡からの帰りに陸橋を渡り史博の屋上に出て、エレベーターを使い大勢で一階に降りると、驚いたのか受付の女性二人が近づいてこられました。お礼を言いましたら同行の四、五人も女性にお礼を言っていました。近道をしたわけではありません。エレベーターを使いたかっただけです。その後皆さんは、「史博への道を覚えたので今度は自分で来よう。」と話していました。本当です。

本日の巡りも無事に終了です。茅ヶ崎市に戻り有志で反省会を行いました。(おわり)

【当面の事業予定】

コロナ禍のために変更もあり得ます。また、勉強会と二十三ヶ村調査会の会場を従来と変更しますので、ご注意下さい。

総会 五月三十一日(火) 十三時三十分から 市立図書館第一会議室にて(郷土芸能保存協会と同日、同場所で開催します)

文化祭写真展 十月三十一日～十一月三日 市民文化会館にて

郷土芸能大会 十一月二十七日(日) 午後 市民文化会館にて

史跡・文化財めぐり
①七月九日(第2土) 第二回大山道を歩く 事前勉強会は六月七日(第1火) 市立図書館第一会議室

②十月八日(第2土) 玉縄城跡を訪ねる 勉強会は九月六日(第1火) 図書館を予定

③十二月十日(第2土) 下寺尾を訪ねる 勉強会は十一月十五日(第3火) 図書館を予定

④令和五年三月十一日(第2土) 玉縄城跡をたずねる 勉強会は二月七日(第1火) 図書館を予定

二十三ヶ村調査会 従来と同様に、毎月、第1・第3火曜日に行います。場所は、原則、市立図書館第二会議室としますが、確保できないときはうみかぜテラスに変えます。時間は、従来通り午後一時半からですが、勉強会と重なる日は、午前中に行います。今年は編集作業の完了をめざします。

【153号正誤表】執筆者の方にはご迷惑をお掛けしました。

会員の皆様、訂正方お願いします。

- ① 32頁上段 歌六種↓歌六首
- ② 33頁下段 僧の読む十四回忌↓十七回忌
- ③ 14頁上段 1～8行を削除(訂正済の号も発行されています)

【編集後記】

私は、戦争は絶対やってはいけないと思っていました。今もそう思っています。しかし、近くの強権国家がいきなり武器を持ってやって来てきて、ここは自分たちの国だ！お前達はどけ／＼と、ミサイルをどんどん打ち込んできたらどうしよう、と思うようにもなりました。一寸先は闇だとは気づいていました。ましていわんや一寸先がどうなるか。

今号に原稿を寄せていただいた方々にお礼を申し上げます。そしてまた、来号にも投稿をお願いします。多くの会員にも同じくお願いします。

本誌に対するご意見ご感想を待っております。どうぞ編集担当の平野(090-8173-8845)まで。本誌はHPでも見ることができま

す。「茅ヶ崎郷土会」で検索。URLは
<http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/>